



<2004 年新春合同例会のお知らせ>

日 時：2003 年 1 月 17 日（土） 14:00—16:30

テーマ：「国立国会図書館と大学図書館の新たな連携に向けて」

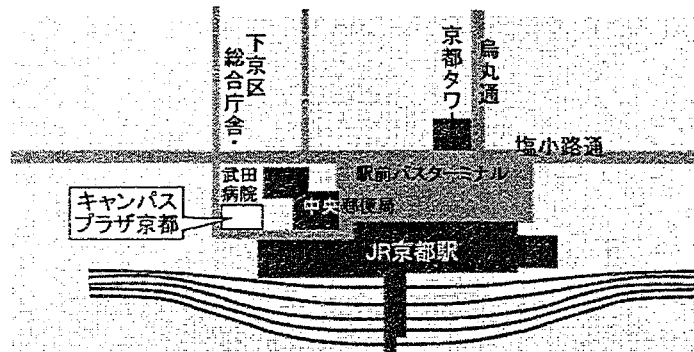
講 師：竹内秀樹氏

（国立国会図書館関西館事業部図書館協力課調査情報係長）

小島和規氏

（国立国会図書館関西館事業部図書館協力課研修交流係長）

場 所：キャンパスプラザ京都 ホール



[目 次]

2004 年新春合同例会のお知らせ	…	1
支部委員役割分担紹介	…	2
大図研京都数珠つなぎ 第 69 回 進藤達郎	…	2
京大図書館史こぼれ話 その五 廣庭 基介	…	3
会費納入のお願い	…	4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

【支部委員役割分担紹介】

2003年度の支部委員任務分担が決定しましたのでお知らせ致します。

支部長	: 大館和郎 (京都学園大学)
事務局長	: 大館和郎 (京都学園大学)
研究企画	: 赤澤久弥 (京都大学)、辰野直子 (京都大学)、呑海沙織 (京都大学)
支部報編集・印刷	: 井上敏宏 (京都大学)、進藤達郎 (京都大学)、呑海沙織 (京都大学)
支部報発送	: 金森孝之 (京都大学)
HPとML担当	: 吉田誠 (京都工芸繊維大学)、赤澤久弥 (京都大学)、辰野直子 (京都大学)
組織	: 村上美代治 (龍谷大学)
財政	: 吉田誠 (京都工芸繊維大学)
全国委員	: 呑海沙織 (京都大学)
大学の図書館・編集委員	: 進藤達郎 (京都大学)

何卒、よろしくお願い致します。

連載コーナー 大図研京都数珠つなぎ 第69回

京都大学工学研究科・工学部物理工学系図書室

しんとう たつろう
進藤 達郎 さん

みなさま、こんにちは。新しく大図研京都支部の会員となりました、京都大学物理工学系図書室の進藤です。以前に一度、見学記を支部報に載せていただいておりますが、あの時はもともとあったレポートをそのまま原稿にしたので、最初から原稿を書くというのは初めてです。かなり緊張していますし、正直言って何を書いたらいいのかも分からないのですが・・・つたない文章ですが、しばらくお付き合いください。

最近気になった話題に、図書館の地図記号の話があります。国土院発行の二万五千分の一地形図に、新たに図書館の記号が登場するというあれです。本を開いた形をしているようですが、それを見て私が思ったのは「やっぱり図書館のイメージは本があるところなんだな」ということでした。学術情報流通の著しい電子化の進展を意識することが多くなった最近の私にとって、「図書館のイメージは本」というある種明快なメッセージの提示は、とても新鮮に映りました。もちろん、見る人によって賛否は分かれるところでしょうけれど。

地図記号のことが気になって、ちょっと地図について調べてみました。地図とは、『広辞苑』第四版によると「地表の諸物体・現象を、一定の約束に従って縮尺し、記号・文字を用いて平面状に表現した図」だそうです。遠い昔、人類最古の地図は、おそらくは木の葉や小石、地面に木の枝で書いた線などで場所を示したものだといわれていますが、こんなに簡単かつ原始的なものでも、確かに上記の定義を満たしているようなので地図といえそうです。そうなると、逆に人工衛星からの地表画像や航空写真などは、いくら鮮明であっても地図とはいえないということになります。

地図は単なる画像ではなく、目的に応じて抽象化されたものであるならば、図書館を表す地図記号も、図書館を抽象化したものということになります。図書館を抽象化するにあたって、建物の形を記号化しようとする人は多分いないと思います。もちろん、図書館の建物は形も大きさも様々で、外形的にあまり共通した特徴はないので、その形を記号化しても特定の図書館を表す場合以外では役に立たないからです。つまり、建物は図書館の特徴であっても本質ではないといえます。

では、図書館の本質は本でしょうか？図書館は情報を扱うところといういい方がよくされます

が、情報には形がありません。それを書き記すために文字があり、書き記される媒体として最もメジャーなものが本だということなのでしょう。その考え方は、地図記号とは少し違いますが、自転車屋さんが自転車を記号化して看板に用いるようにごく自然なことです。しかし、なんとなく私の心の中に違和感が残っています。「ほんとうに図書館の本質は本だろうか・・・？」

この疑問は、実は常々感じていたことでもあります。図書館の職員になってから1年余り、「どんな仕事をしているの？」と家族や知人から聞かれるたびにいろいろと苦心して説明するのですが、「雑誌を扱っていて」「受入の仕事をしていて」「受入とはどういうことか」と・・・。どうしても要領を得ないまま結局、「本を貸したりする職場なんだね」というような理解しかしてもらえないまま終わってしまうことが多いのです。単に私が説明したがりがりなだけで、実はどんな職業でもその程度の理解しかされてないのかもしれませんが。図書館の地図記号を見たとき、そのシンプルさに打たれたのはそんなわけです。どなたか、図書館の仕事について簡潔に要領を得た説明をしてくださる方がいらっしゃいましたら、是非教えてください。

ちなみに、この話で行くと「博物館の本質は神殿か？」ということになってしまいます(笑)。博物館の記号は、神殿をイメージしたものだとして新聞記事に書いてありました。たかが地図記号ではありますが、シンボルとしての記号はそのものの本質をあらわすべきという私の考え方からいけば、図書館の記号は博物館の記号と比べれば数段まともなものだと思います。

余談をついでにもうひとつ。地図というものは、絵地図を使っていた昔から、軍事的な用途に使われることが多かったようです。現在でも、近代測量技術による地図作成は、多くの国で軍の関係機関やそれを前身とする機関で行われています。日本の国土交通省国土地理院も、その前身は陸軍参謀本部陸地測量部でした。今回新たに増えた図書館や博物館などの記号が今まで地図になかったのは、そのような地図の歴史を反映しているのかもしれませんが。

京大図書館史こぼれ話 その五

京大初代図書館長島文次郎博士と「老いらくの恋」事件

廣庭 基介

川田順夫人俊子の島博士夫人榎乃への眼差し

「老いらくの恋」を決行して自分の想いを遂げた俊子氏は、27歳年上の夫・川田順が昭和41年(1966)、84歳で永眠してから数年経つと、その間に世間から受けた批判や評論に対する自分の考えや反論、自分の持った喜びと苦悩などの記録、自分が川田順と結婚したことにより交際する機会を得た多くの有名人に関するエピソードなどを、随筆風自叙伝にまとめて何冊か出版しました。その中の一冊『死と愛と』(昭和45年、読売新聞社発行)の272ページから276ページにかけて、彼女は自分がどのようにして川田順と知り合うことになったのか、その経緯について書いています。

川田俊子は、自分が川田順と知り合うことになったきっかけは、島博士夫人・榎乃さんの熱心な勧誘を受けたお陰であって、そこで初めて島邸の文学講座に参加した上、川田順に最初に出会ったと、自ら明らかにしています。その部分と関連部分を原文のまま引用します。

(1)【p.273、4行目から。「榎乃さんは明治二十三年のお生まれとのことだが、最初に結婚されたご主人を早く亡くされ、三十歳を過ぎ子供もある身で本願寺系の女専の国文選科へ入学された。卒業後母校付属の女学校の先生をされていたが、四十歳近くになって、二十歳年長の島文次郎博士と結婚された。(中略)『芳梅』(注1)の歌でも想像されるように、榎乃夫人はたびたび夕陽居(注2)を訪ねられたらしい。いまにして思うと、密かに、男性としての川田にあこがれてられたのではないだろうか。国文学のことを、作歌のことを、尋ねられることはいくら

でもあったであろうし、足を繁くさせたことは容易に想像出来る。川田の方は、前記の弔歌一首(注 3)よりなく、私の目の前で書いていたその態度からも夫人に対して何の感情も持っていなかった。】

(2) 【p.274、5行目から。「昭和十九年五月下旬のある日、近くに住む私は、島夫人の熱心なおすすめで初めてその家に行った。夫人の案内で階下の部屋に入ると、川田がすでに来ていて島博士との話がはずんでいた。(中略)私は両先生にこうして親しくお会いするのは初めてでかたくなっていた。ところが島博士は同じ町内に住む親近感からか、また私の夫が京都大学で教えているためか、人なつっこい態度でいろいろと気を配り、夫のことも話したりして、川田に紹介して下さるのだった。(中略)川田は教室ではないので楽な姿勢でと背広を脱ごうとすると、すばやく島夫人が介添えをし、上着はハンガーに掛けられた。(中略)講義が終わり暫くして立ちあがろうとすると、島夫人はいそいそとさっきの上着を着せかけられるのだった。その態度に何かしら情の籠もっているように、私には思われ眺めていた。】

(3) 【p.276、2行目から。「その後私が川田のもとへ来るようなことになって、実家へかえっていた時、ある時突然島夫人が来られた。母が出たので二階にいる私のところへ来て、”ぜひおめにかかって話したい”と言ってられるとのことであつた。(中略)私はどうしても会いたくなかった。そして断って貰った。島夫人は理解あるとはいってもやはり女性だ。その上宗教的モラルによつた学校で学ばれた教育者だ。複雑な思いで来られたにちがいない。おめにかからなくてよかつたと、私は今も思う。】

因みに『死と愛と』が発行されたのは、前述の通り昭和45年(1970)12月のことでしたから、島樫乃夫人の死後、既に15年、川田順の死からでも約5年も経っていました。

(注 1):『芳梅』とは、島博士夫人樫乃氏が昭和30年9月1日、京大附属病院において65歳で亡くなった後、樫乃氏の前夫で、養子に迎えた健次郎氏との間に生まれた一人息子の一郎氏が、母の十三回忌に際して、母が遺した三千首の和歌から390首を選んで昭和42年に自費出版した歌集の書名です。(次号へつづく)

ひろにわ もとすけ (元京大図書館員)

◆◆◆会費納入のお願い◆◆◆

寒冷の候、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。毎号、大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしていますが、残念ながら会費の納入率は依然として思わしくない状況にあります。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。既に新会計年度に入っていますので2003年度の会費納入をお願いします。

またすでに2002年度(大図研会計年度2002.07～2003.06)は終了していますが、納入率は六割程度です。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

記

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田(京都工芸繊維大学) myos@kdm.jrnet.ne.jp までお願いいたします。

◆寄付、受け付けています◆ 12月2日(火)に開催された忘年会にて仏教大学の竹村心様より6,000円のご寄付をいただきました。ありがとうございました。